

# 大正期池袋児童の村小学校における綴方教育の検討

—文集を中心に—

山本茂喜

## はじめに

随意選題論争をへて「表現のための生活指導論」へと至った綴方教育の、その後の流れを把握するためには、私立池袋児童の村小学校（以下「児童の村」と略す）をめぐる諸事象の検討が不可欠となる。大正末から昭和初期にかけての綴方教育は、子供の「生活」のとらえ方という問題を中心に展開したと考えられるが、その子供の「生活」を徹底して尊重したのが児童の村の教育なのである。

児童の村は、「教育の世紀社」（同人は野口援太郎、下中弥三郎、為藤五郎、志垣寛の四人）を設立母体として、大正13（1924）年4月に開校した実験校である。子供の自由な生活を見つめ直すところから教育を改造しようとした児童の村の13年間（昭和11年7月閉校）の試みは、「最大限の自由奔放な学校経営を試行することにより児童の内発の興味に基づく徹底した児童本位主義教育を実践した<sup>1)</sup>」とされ、「大正期のいわゆる「自由教育」をもっとも徹底してここに実現したもの<sup>2)</sup>」として早くから注目されている。特に近年、原資料に基づいた研究が着実に積み重ねられ、その教育の実態も明らかになりつつある。<sup>3)</sup>

ところが綴方教育史研究においては、児童の村関係者によって刊行された雑誌『鑑賞文選』（大正14年6月創刊）や『綴方生活』（昭和4年10月創刊）についての考察は見られるものの、<sup>4)</sup>村内部でおこなわれた実践そのものについては、ほとんど明らかにされていないのが現状である。

本稿は、児童の村の綴方教育の中心となった「文集」による一連の学習の実態を明らかにすることを目的とする。児童の村において作製された文集は、次の四種類に大別することが可能である。

- a. 各学級ごとに定期的に作製された文集
- b. 子供が個人的に作製した文集
- c. 児童の村全体の作品を集めた文集
- d. 遠足、旅行等に際して作製された文集

aは、まず野村芳兵衛の学級において作製され、やがて峰地光重や小林かねよの学級にも波及したもので、数ヶ月おきに学級の子供の作品を集めて刊行された文集である。bは、a以外に童話や童謡を集めて1人から数人で作製した文集である。またcは全校の作品を収めたものであり、dは、児童の村の重要な活動である遠足や旅行、夏の学校、あるいは卒業などに際して特別に作られた文集をさす。

以下では、このうち大正年度間に野村芳兵衛学級で作製された a, b の文集を中心に、その実状を整理し、次いでそれらの文集を用いておこなわれた学習の構造を明らかにしていく。児童の村における文集による学習の基本形態は、野村芳兵衛の大正年度間における a, b の文集をめぐる体験によって形成されたと考えられるのである。

## 1.

池袋児童の村小学校は大正13年4月10日に、校長野口援太郎の自宅を校舎として開校した。第一学期の学級編成は次のとおりである。

1の組（三・四年）19人、担任野村芳兵衛

2の組（一・二年）20人、担任志垣 寛

3の組（一年）18人、担任平田 のぶ

（大正13年7月末時点<sup>5)</sup>）

「教師対生徒と云ふ觀念に因はるゝ処なく、教科目や教授時間、はては教授法など云ふものに縛らるゝことなく、児童らしき生活を生活せしむる場所としての新しい学校<sup>6)</sup>をめざし、「児童の村に於ける彼等の生活は全然彼等の団体の自治に任せる<sup>7)</sup>。」とした児童の村では、教科・教室・教師・時間割を選択する自由を子供に与えようとするところから出発した。しかし、たちまち混沌とした状況を呈するに至った。子供たちは一日中校舎内を走り回ったり、図画工作だけに熱中するという有様であった。

特に三・四年生という、公立学校の教育から一挙に解放された子供からなる野村学級において、問題は深刻であった。一年後に野村は当時をふりかえり、「私たちは去年の四月から子供に彼自身の生活をさせた。その間もう堪らないと思つたことが何度あつたかも知れない。要するに無秩序の生活が子供の生活ぢやないかと疑つたことさへ何度かあつた<sup>8)</sup>。」とのべているが、回想記によれば、「この教育は間違っていたと公表してください。私は国へ帰ります。」と野口校長に訴えるところにまで追いつまれている<sup>9)</sup>。

野村学級による文集「めばえ」第1号は、このような状況の中、大正13年7月に発行された。その間の経緯は、志垣と野村の回想を照合して整理すると、およそ次のような事情であったと思われる<sup>10)</sup>。

1. 大正13年5月、野村学級の子供たちが綴方をもちより、野村が「原稿を書いて謄写して」文集を作り学級に備えていたが「別段引きだしてみるものもなく」、文集を用いた学習を構成するまでには至らなかった。
2. 「村だより」（父兄への通信。大正13年6月2日発行。月1回発行されたと思われる<sup>11)</sup>）に子供の作品が採録される事になり、子供たちは自分の作品が謄写されることに喜びを感じた。「そんな事が動機となつたのか、いつの間にか、彼たちは自分のものを自分で謄写する興味をおぼえ」、いく人かが自分で自分の綴方を鉄筆で書き、さし絵も入れ、文集が生まれた。子供たちによって「めばえ」と名づけられ、表紙は野村が書いた。

3. 完成したのは7月なかばである。「皆は自分の手になつたものを手にしてどの位愛撫したか。……毎月作ろうと語り合つてゐた。」

このように、野村が独力で作った文集に対する子供たちの無関心と、野村の力をかりつつも子供同志で作らせた文集に対する彼らの喜びとの対比から、野村は何を感じとったのだろうか。

野村は教育の世紀社の機関誌『教育の世紀』に「七月二〇日」付の記事「私のことや子供たちのこと」を發表し、次のように述べている。<sup>12)</sup>

「メバエ」と言ふ文集を子供たちと一しよになつて造つてゐます。……子供たちが午後から学校へ集つて文集を作りました。カットも書けば字も子供たちで書きます。そして謄写も子供たちで書きます。子供が作つて子供が書いて子供が刷つた文集、それは教師一人で造つたものよりも、どんなにか味があります。それよりか子供と一しよに仕事をするのは嬉しいことです。

子供が作った文集に「味」をみとめ、「子供と一しよに仕事をする事」を「嬉しいこと」と感じている。野村は後に文集を作製することを「協力」としての重要な「作業」として位置づけていくが、その継起をここに認めることができるのである。

さて、この「めばえ」第1号について概観しておこう。<sup>13)</sup>

表紙には上部に芽のカットとともに「めばえ」と誌名が記され、その下には収録作品名と作者名が記載されている。中央にはたて書きで「第壹號 大正一三・七 児童の村小学校第一組A・B」とある。なお、「係 久布白三郎 中村正人」とあり、すでに第1号の段階で係が決められていたことがわかる。久布白三郎は文集作製の中心になった子供であり、中村正人はさし絵をかいた子供である。

以下に、収録作品名と作者名を掲げておく。

- |                                  |       |       |
|----------------------------------|-------|-------|
| ※1. ひっこし                         | 志垣 乾郎 |       |
| 2. おともだち〔おともだちと私〕                | 堀 利子  |       |
| 3. 村の一日                          | 阿久沢 忠 |       |
| 4. けさはがいたかつたこと〔きのふはしごだんからおこちたこと〕 |       | 山崎知恵子 |
| 5. 土曜日〔日曜日〕                      | 福井一之助 |       |
| ※6. あそび〔なはとび〕                    | 杉 直子  |       |
| 7. はなび                           | 武井 澄雄 |       |
| 8. お母さんが学校へいらつした日〔おかあ様きた時〕       |       | 渡辺 忠恕 |
| ※9. なはとび                         | 吉井 恂子 |       |
| 10. 舟                            | 原 大伍  |       |
| 11. 僕はえんぴつです                     | 中村 正人 |       |
| ※12. ヘイタイゴッコ                     | 吉田陸奥男 |       |
| 13. 水泳                           | 菊地 春子 |       |
| 14. 〔きのふ〕                        | 福井隆之助 |       |

15. 愉快な一日〔神田にいった日〕 吉田弘治郁
- ※ 16. へいたいあそび〔へいたいごっこ〕 杉山 彰
17. 二時間目のあそび時間〔二時間目のあそびじかん〕 田中 充子
18. おにはの花〔私はおにはのぼらです〕 阿久沢ゆかり
- ※ 19. ぢしんのうた 利光 博
20. 小犬 久布白三郎

(※は童謡，他は綴方作品。表紙の題名と実際の題名とが異っている場合は，〔 〕の中に実際の題名を記した。)

綴方・童謡ともに，ほとんどが児童の村や家庭での日常生活を題材にしたものであり，題材・表現ともに子供の自由に任されているようである。しかし，全体として作品のレベルとしては決して高いものではなく，11や18のように，ありきたりな擬人化の表現もあり，童謡も「赤い鳥」的な型が感じられる。

その中では久布白三郎「小犬」が傑出した作品であり，志垣や野村の著述<sup>14)</sup>にも再録されている。この作品は児童の村の遊びの中から自然に生まれた綴方であり，「生活がうんだ成績である。」<sup>15)</sup>とされている。

他の作品もすべて自発的に書かれた，というわけではなく，志垣の記しているところによると「一号には可なり教師が参興してゐたので殆ど全体が何か一篇宛かいた」<sup>16)</sup>のである。したがって作品の提出にあたっては，なんらかの形で野村の指導が加えられていたと考えてよいだろう。

野村が表紙に記した題名が，文集中の題名と異なる場合が多いことに気づくが，ケアレス・ミスと思われるものを除くと，野村が自分の適切だと考える題目を書いたものと思われる。しかし，文集に収められた文には題名・内容ともに修正は認められない。ここにこの時期の野村の姿勢を見ることができる。やがて野村は作品については自然の「発酵」を待ち，題名や文章・表記については，文章完成後の学習において子供と共に訂正していく，という形態をとるようになる。

## 2.

文集は第1号以降も次々と発行されていった。「めばえ」第1号には「こんどは，なつやすみに生れた，皆さんの作品を集めて第二号を発行したいと思つてゐます。」「第二号 大十三. 九. 十五」と野村によって記されていたが，予告どおり順調に発行されたようである。志垣によれば，「九月になつて予定どおり第二号が出来た。こんどは表紙も子供の手でかけられ，製本も彼たちの手でなされた。」とあり，「興味の続いている子供たちが四人だけで作った。」とされる。<sup>17)</sup>表紙から製本まで完全に子供たちの手になる自発的な作業であつたと思われる。

「めばえ」第2号の作品名と作者名を記しておこう。<sup>18)</sup>

- 一 かやの中の遊<ママ> 阿久沢 忠
- 二 田舎へいく時 吉田弘治郁

- 三 夜の大事件 久布白三郎  
 四 やどにとまつた事 中村 正人

児童の村の夏の行事としておこなわれた「夏の学校」（7月30日～8月15日、於野尻湖）での体験を中心に、夏休みの生活をえがいた作品が集められている。特に久布白三郎「夜の大事件」は「一二の新聞にも記載され<sup>19)</sup>」、自分で戯曲化もしている<sup>20)</sup>。久布白は卒業するまで文集の中心になって活動した子供であり、同級生によって後に「天性のリーダーだった<sup>21)</sup>」と回想されるこの子供を中心とした自発的な活動によって野村学級の文集発行は軌道に乗せられていったと考えてよいだろう。

さて、三号・四号は「女の子だけ」で作り、五号には「まだ一度もかかぬ人々」が書いた。「さうして毎月一度か二度宛四五枚綴の、めばえが出来た。」と志垣は記している。<sup>22)</sup>

ここで、『児童の村小学校関係資料』に保存されている野村自作の「児童の村年表」<sup>23)</sup>、および文集をもとに、大正年度の3年間に野村学級を中心に発行された文集を整理しておこう。<sup>24)</sup>

大正13年	7月	めばえ第1号
	9月	めばえ第2号
		(この間、第3号、第4号)
	11月	メバエ
大正14年	7月	メバエ2月号(冬休の生活)
	4月	MEBAE 1号
	6月	MEBAE 6
	※9月	村の子供
	12月	童話第1集～第4集
大正15年	1月	童話第5集
	5月	MEBAE
	9月	朝日第1巻第1号(創刊号)
	10月	朝日第1巻第2号
昭和2年	1月	JAPAN
	3月	朝日第2巻第2号(雪の文)
	〃	卒業記念号

(誌名は原則として表紙に記されたものによった。)

先の分類にしたがえば、「めばえ」・「JAPAN」がa(学級が定期的に出す文集)、「童話」・「朝日」がb(個人の文集、ただし「朝日」は後にaに近い存在となる)、「村の子供」がc(全校的な文集)、「卒業記念号」がd(行事等の文集)となる。これらの文集の1

つ1つについての検討はここではおこなわないが、比較的重要だと思われる「村の子供」と「童話」について、次に苦干の解説をしておこう。

#### ①「村の子供」について

大正13年9月に峰地光重が上京し、志垣寛にかわって2の組（一、二年）の担任となった。峰地は鳥取時代にすでに文集を作成していたが、<sup>25)</sup>着任後ほどなくして『白鳩』と題した文集を子供と共に作製した。おそらく10月～11月のことだと思われる。「表紙の絵と云い、中味と云い、本<sup>26)</sup>当に子供らしさが露骨に表現されてゐて、頗る面白いものが出来てゐる。」<sup>27)</sup>と峰地は記している。・野村学級のみならず、低学年の峰地学級においても文集が作製されるようになったわけだが、それを基盤として、全校児童と教師の作品を収めた活版刷の文集「子供の村」が発行されることになった。

『教育の世紀』大正14年10月号の「児童の村だより」（峰地）には、次のような予告がのせられている。

##### △文集「こどもの村」の誕生

これまで一の組では「芽生」二の組では「白鳩」という謄写刷の文集をだしてゐましたが、この九月から、全校児童の作品を集めて、美しい活版刷の文集「こどもの村」を出すことになりました。当分年二回位発行する見込です。四月以来、いい作品が可なりたまつてゐますので、生気に充ちたい文集が出来るとおぼつかうと思つてゐます。文集は九月の終りまでには出ます。

予告どおり文集「子供の村」は大正14年9月に発行された。<sup>28)</sup>全30ページ、一年から五年までの児童作品と、野村・峰地の文章が収められている。作品は童謡・綴方・童話・日記・通信（ハガキ・手紙）など多彩である。7月～9月に書かれた作品が中心となっている。

文集の最後には、編者（おそらく野村）によって次のような文章が載せられた。

##### 終りに

目高のやうにぴちへ、元気よく躍つてゐる。野蛮人のやうに素朴で力づよい。青竹のやうにすくへ、伸びてゐる。——それが児童の村の子供の文章の生命であらう。我々は一字一句の訂正をも施さないで、生のままをこの文集に一人一篇づつあつめた。童話あり、童謡あり、書翰あり、紀行あり、日記あり、秋の野の雑草のやうに、この文集にあつめられた。勿論玉石混淆だ。それに、教師の文章を加えてこの文集を作つたのはうれしいことです。（編者）文集を作製しはじめてから一年たった時点での、児童の村の生活から生れる子供の作品の持つ「生命」に対する強い信頼が感じられる。

事実、伸び伸びとした児童の村の生活を反映した、生き生きとして飾りのない表現が生まれるようになっている。一例をあげよう。これは大正14年の「夏の学校」（7月22日～8月4日、於九十九里）での体験をもとに書かれたものである。

夏の二週間　五年　杉　直　子

一、おばけ

第二宿舎で女はみなそろつてねた。

松「お前だれだ……」

私「だれでもないおばけだよ……」

一同「おほほあははは……」

二、とこにて

夜中に和子さんがなきだした、皆「どうしたの……え、どうしたの」

和子「おしつこにゆかれない……」

三、外

先生が古作先生の所にいつてしまった、和「外にいつていい。ちよつとだからね」直子、松枝「いけないつたらいけないわよ、そんなことをいふと外にほうりなげるよ」松枝さんと私は和子ちゃんをだいてなげるまねをした。和子「のぶ先生金ちゃん先生たすけて……」私「うそだよ……」

四、じびきあみ

じびきをひきにいつた。ゑんやらとひきだした。峯地「杉さんはきのふまでねていたのだから引くのよしなさい。」私「あゝたすかった。」松ちやんとかいがらをあつめてみると。「あみがあがつたよー」といふとゑがしたのでいつてみたらほうづきとかいめんをくれた。（後略）

②「童話」について

文集「子供の村」が発行されたころ、平田のぶが児童の村を去り、10月に小林かねよがかわって担任となった。小林はやがて文集「すずめ」を発行する。こうして、子供中心（野村学級——めばえ、朝日）、教師中心（峰地学級—白鳩、小林学級—すずめ）という違いはあるものの、大正年度のうちに、文集発行は児童の村全体に広がっていった。<sup>29)</sup>

一方、大正14年12月から翌年1月にかけて、五冊の童話集が野村学級で作製されている。<sup>30)</sup>唐木田武夫・福沢昇八郎という二人の子供の作品を収録する「全集」である。内容は次のとおり。

童話第1集（大14・12・5）	魔法の石	唐木田武夫
	列を作つた黒い物	福沢昇八郎
童話第2集（同 上）	金のお城	唐木田武夫
童話第3集（同 上）	大きなどんぐり	唐木田武夫
	七面鳥の卵	福沢昇八郎
童話第4集（同 上）	馬のしつぽ	福沢昇八郎
	スペートのキング	唐木田武夫
童話第5集（大15・1・13）	黒い魚	福沢昇八郎
	黄色なりんど	唐木田武夫

童話はこれ以前から、当時の三・四年生の内の何人かの子供によって綴られていた。はじめのうちは、野村が読んで、話して聞かせた、あるいは子供が自分で読んだグリム童話等の模倣的なものであった。野村は「第一自分でこんなものを書き上げてみようとして書きあげた子供の喜びを思ふだけでも私はうれしかった。」「こんなのを作つてみると、その中に君の毎日の生活からでも夢が生れて、一つの童話が作れるかも知れない<sup>31)</sup>」と述べていたが、やがて実際に児童の村の生活をもとにした想像によって童話が生まれるようになり、模倣を脱するようになった。野村は子供の童話を例にとり、それがどのような生活事実から生まれたのかを分析して示している。<sup>32)</sup>

これらの童話集がまとめられる経緯について野村は「児童の村だより」（『教育の世紀』第4巻第2号、大正15年2月）に次のように記している。

#### ◇全集

三年の福沢君と四年の唐木田君とが自分等で造つた童話を謄写にすると言うので、毎日やつてゐましたが、何分一人で十二三の童話を書いてゐますので、（四月からためたもの<sup><マ></sup>原稿紙に百五十枚づつ持つてゐます。そこで刷つてためたものが、失つたり混つたりして困つてゐました。そこで僕は全集の話をして、第一輯から第十二輯位まで分冊にして出したらと進めました。二人はそれに賛成しました。一輯が出る度に級のお友だちに配つて、批評を求めてゐます。それで、何時も一時間づつ二人の童話の共同研究をしてゐます。作の批評は勿論、印刷上のことまで批評してゐます。そして最後に作者に一度朗読していただくことにしてゐますが、作者に読ませると、他の者が読んでは出来ない読みぶりの味の出ることを知りました。それで子供たちも必ず作者に読んでくれとたのんだりします。

童話集を用いた学習の形態が形成されていることが注目されるが、この点については後で触れることになる。

野村は大正15年3月に合級通信「合唱—1— おとうさまや、おかあさまへ」を発行しているが、<sup>33)</sup>その中の「今学期学習状況一般」の「綴方」の項には、まず「△童話」の項目があり、次のように述べられている。

童話は皆の子供が書きませんが、読んでやつて 味はせるだけは 皆の子にやつてゐます。唐木田君と福沢君とは、童話集の第六集まで出しました。今学期〇〇〇（三字不明）続くだらうと思つてゐます。外に三島君が「熊吉のぼうけん」を造り 武井君が「赤い虫のなつたりんご」外二三点を造りました。外に川辺君が作りました。<sup>34)</sup>

この童話集はやがて子供たちによって「一本杉」と名づけられたが、朝日新聞社見学をきっかけに「朝日」という名が正式に決まり、発行が続けられた。収録される文は、除々に生活をえがいた綴方が中心となり、童話は少なくなつていった。唐木田武夫らの卒業をきっかけに出された「卒業記念号第八号」<sup>35)</sup>（昭和3年3月）が「朝日」の終刊となっている。

### 3.

以上、文集発行の状況について概観した。



これらの文集を用いて、どのような学習がおこなわれたかを考察するのが以下の課題となる。ここではまず、野村がどのような作品を評価するのかを確認しておきたい。

野村は綴方に対する一定の基準をはじめから持っている、それを子供の作品にあてはめていったのではなく、文集の発行を通して、児童の村の子供の作品から新しい基準を見出していったようである。

『教育の世紀』（第3巻第11号、大正14年11月）に発表した野村の「子供の作品を取り出して——綴方教育雑感を書くつもりで——」はエッセイの形をとっているが、野村の綴方に対する初期の見解を知るために重要な文だと思われる。その中で、先に触れた久布白三郎「小犬」（「めばえ」第1号）を引用して詳しい評を加えている。

この作品には、捨てられた小犬を子供たちが拾い、「ピシ」と名づけてかわいがりが、やがて逃がしてしまうまでの一連のエピソードが綴られている<sup>36)</sup>。この出来事は開校直後の大正13年5月のことと思われるが、<sup>37)</sup>その数日後、「先生あの小犬は、まだ生きてるだらうかね。」と言ってさし出したのがこの作品だと言う。

「小犬」に対する野村の評を整理してみよう。

①「Kの文は生きてる。」

「何れにしても、この文章を通して生き生きとした子供の生活が波打ってくることは事実だと思ふ。」

②「犬の名前を「ピシ」とつけたのもおもしろいではないか。ピシピシと、草の根の折れる小さい音が、いかにも鮮かにきかれるではないか。何時もさわがしいKが、小さい草の根の折れる音に耳を澄したスタイルが、私の眼にありありとうつつる。」

「かへるとちう、むぎのほをとつてふきながら、みんなしよんぼりとかへつて行つた。私はKが大人くさい程、そうした折、黙りこんで、麦笛に心をやつてゐることを感ずることが出来る。」

野村は「私はこのKの作文をこれ迄に何度読むか知れない。」として高く評価しているわけだが、その評価の要因をさらにまとめると、次の二点になる。

①文を通して、生き生きとした子供の生活が読みとれる。

②文を通して、作者の姿を想像することができる。

児童の村での二年間の実践に基づいて著された『新教育に於ける学級経営』（大15）において野村は、「いい文」の基準を「作者の生活を通して、作者の個性美の表現されたもの」とし、具体的に次の四点をあげている。<sup>38)</sup>

(イ)概念的なものや、徒らに空想的なものや、又生活を忘れたセンチメンタルはいけない。そのためには文の底に生活観照の自覚が動いて居り、最も特殊な生活事実が描写されてゐなくてはならぬ。……

(ロ)文に表現されたことが、最も特殊な、或る日の或る場所での生活であっても、その生活に作者の個性の動きが、強く表現されてゐなくては、いい文とは言はれない。

い文のよしあしは……寧ろ何度となく読んでみて、心の奥深く響いてくるもので、然もその響きが新鮮で、どこかどっしりして居り健康なものであればいい。

(二)子供のものは……鏡のやうに自然を写してゐたりして、欠けてゐても純な美しさがある。そこに子供の文の特質がある。

「小犬」がこの基準にほぼあてはまる、というよりむしろ、「小犬」等の児童の村のすぐれた作品から、野村がこれらの基準をつくりあげていったと言う方が正確であろう。

#### 4.

「小犬」が書かれたのは、開校時の混沌状態の中で野村が苦悩していた時期である。一日中図画工作しかない生徒に対し、「こんなに好んでやるなら、図画手工ばかりやつていても、その人の生活体系は組織されて行くんじゃないか。」と思ったり、逆に、「そんなにお母さまが心配なら——実は僕も心配なんだが——どこかで少しづつ、算術や読方の指導もすることにしよう。」と考える、揺れ動く心を野村は記している。<sup>39)</sup>「子供の学習系統」と「教師の教授系統」の間での苦しみから、野村は次のような考えが育っていったと言う。<sup>40)</sup>

綴方とのみは言はない。凡ての芸術的作品はうるほひを持つた生活からのみ生れる。自由選題、課題のそれが問題ではない。先づ学校をして出来るだけ、子供たちにとつて、うれしい、温みある生活の場所であらせたい。慈味豊かなる生活からこそ、太りたる作品が生れるであらう。

野村の綴方に対する考えをまとめると次のようになる。

生活の充実——→作者の生活を通して、作者の個性美の表現された作品の創出へこの骨組みは、基本的には大正中期からの「表現のための生活指導論」と同一である。ただ、綴方の問題を、抽象的な「美的認識の生活」ではなく、実際の学校生活へ拡大していく発想が目される。しかし、これとて、次の志垣の論と大差はない。

私は綴方の教授に於て最も肝要な事は学童たちの生活そのものを指導することであると思ふ。生活指導と云ふことは今云ふ自分の生活の中に光を見出さしむることである。これに就ては子供たちに其の欲するがままの生活を生活せしむるにこした事はない。彼等が心ゆくままの生活をなすとき、<sup>41)</sup>彼等の綴方の題材は常に豊富に存する。

問題は、単なる「生活指導」を超えた綴方教育を野村が創出するにあたって、文集がどのように関与したかである。

野村は、論文「私の学級経営（一）」（『教育の世紀』第3巻第1号、大正14年1月）において、「芸術的表現」の教育として、次の四点をあげている。

- ①「生活にうるほひ」があること
- ②「自然に親しませること」
- ③「いい創作に親しませること」
- ④「自分の作品に就て内省してみること」

後は強制をさけ、「発酵」してくる作品を待つ、と言う。

野村はまた学級通信「合唱－1－」（大正15年3月）において、「綴方」の項に、童話・童謡集・文集「メバエ」・鑑賞文選の四点をあげ、「鑑賞文選」に関して次のように述べている。

毎日、鑑賞文選を一しよに味わつてゐます。私は小さい間は、愉快に遊んだり勉強したりしてゐさへすれば、表現の道をきつと子供が発見するものだと思つてゐます。例へば綴方を書かない子供があったら、

1. おもしろく遊んでゐるかどうか？
2. いい文を読んでゐるかどうか？

この二つのことが出来てゐて、文を書かないのでしたら、しばらく待つてゐればきつと書くやうになると思ひます。もつとも、子供が喜んで書く機会を造つてやることも大切だと思はれます。

1. 文集を発行するとか
2. 自作の文を保存するとか。  
前の文を読んでゐると、又書きたくなる。
3. その他にいろ／＼な方法があるわけだと思つて、一人一人の子供に適した方法をみつ  
けたいと思つてゐます。

このように、「生活の充実」以外に、次の3点の指導が考えられている。<sup>42)</sup>

- ①「いい創作」「いい文」の鑑賞
- ②作品の「内省」
- ③「喜んで書く機会」を造る

「鑑賞文選」や「赤い鳥」とともに自分たちの文集や童話集を読み合うことが①や②の学習となる。さらに文集の発行や保存が③の「喜んで書く機会」造りとなるわけである。

このうち、文集や童話集を子供同志で読み合う学習は、単に「いい文」の鑑賞を超えて、生活の「内省」として、野村の綴方教育の中心に位置づけられるようになる。

文集を読み合うことは、子供の生活を表現した作品を、「お互でたのしみ合<sup>43)</sup>い、「よそからはわからぬ味<sup>44)</sup>」を感じとることが中心となる。野村には「作品は結果ではない。作品の中には学習の姿が生きてゐる。作品は生活であり過程である。」<sup>45)</sup>という考えがある。したがって、作品を読み合うことを通して、子供の「生活」や「学習の姿」（児童の村においてはこの二つはほぼ同義語となる）をお互いに「観照<sup>46)</sup>し、「人生の味と云ふもの」を味わおうとするのである。このように、作品を通して毎日の生活を見つめていくことが、生活の「内省」として、文集を用いた学習の大きな目的となるのである。

さて、このように、文集の作製から文集を読み合う学習をへて、文集の保存に至るまでの一連の学習を、野村は「文集による学習」と呼んでいる。『新教育に於ける学級経営』においてまとめられているところを見てみよう。<sup>47)</sup>

#### A 文集による学習

(イ) 文集の作製

- 一 子供たちの作った文を、有志制度によって出来た文集係が、放課後又は独自学習の時間を使って、謄写版で刷る。挿画などは作者に書かせたり、画の上手な子が書いたりする。
- 二 或る一二の子供が、自分等の作った童話を集めて、童話集を発行したり童謡集を発行したりして、学級の友に頒つ。

(ロ) 相互学習

- 一 最初もらった文集を、皆で低声に読みながら誤字、脱字、句読点の誤りなどに注意して校正をする。
- 二 作者に読んでもらふ。作者が読むと、非常に味のある読みぶりができる。どうしても他の者では及ばない点がある。
- 三 質問、感想、批評をする。それは文についてばかりではなく、実際の生活についても、印刷の方法についてもいろいろである。

(ハ) 保存

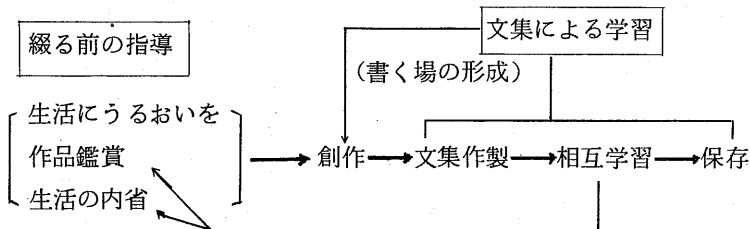
- 一 友だちの作品や、自分の作品は、凡て、自分々々の本箱（密柑箱を、ハترون紙で張ったもの）にしまっていて、時々出して読む。

二 (略)

ここで、文集をお互いに読み合う学習を「相互学習」として位置づけている点に注目したい。野村は、論文「学習の種々相と時間割の考察」（『教育の世紀』第2巻第12号、大正13年12月）において、「私は児童の村小学校において四月から九月まで全然共同体的な時間割を定めることなしに尋三・四の子どもと共に学習してみた。そして共同的時間割はある程度まであった方がいいといふことを実感した」として、子供の「学習相」によって、独自学習・相互学習・講座学習の三つの学習時間を区分することを主張している。すなわち、「子供の学習系統」による独自学習、「教師の教授系統」による「講座学習」、「双方の接点」としての「相互学習」である。<sup>48)</sup>

野村は、文集の作製を独自学習に、「文学の鑑賞と理解、及創作の指導」を講座学習に位置づけている。<sup>49)</sup>しかし実質的には、「文集による学習」全体が、相互学習の領域に含まれると考えるべきだろう。「教育は協力だ。協力によって凡ての生命は育つのだ。」<sup>50)</sup>という考えがこの時期の野村の基本理念だが、それを実践で支えているのが「相互学習」であり、中でも重視されたのが「文集による学習」なのである。

ここで、綴る前の指導から「文集による学習」までの学習過程を整理しておこう。



このように、生活の充実・作品鑑賞・内省等の綴る前の指導をへて、自発的に文を綴らせ、その作品を“文集に作製”し、“相互学習”の後、“保存”する、というのがその大筋となる。「文集による学習」には、「文集作製」段階における「協力」による「作業」や、「相互学習」段階における「生活の味」の発見・「生活内省」等、野村独自の意味づけがなされる。これらが、綴る前の指導とも有機的につながりながら、全体として、一連の綴方教育を構成しているのである。

#### おわりに

昭和期に入ると、児童の村にも一定のカリキュラムが形成されていくことになる。野村は教科目群を「芸術科」、「科学科」、「人生科」に分け、文学・美術・音楽・劇を「芸術科」とする。綴方は、読方・書方・外国語とともに、この「文学」に含まれ、<sup>51)</sup>時間割の中に組み込まれていくのである。

このように、児童の村の教育実践の定型が形成される「中期」<sup>52)</sup>において、文集を中心とする綴方教育がどのように変化していったかを検討することが次の課題として残されている。

また、文集以外にも、文章表現に関して児童の村でおこなわれた数々の実践——旅行をきっかけとしたプロジェクト学習、村の新聞、自然な学習の場の形成等——の掘り起こしも進める必要がある。これらの作業を通してはじめて、児童の村の綴方教育史における位置を明らかにすることができるだろう。

#### 〔注〕

- 1) 小島勝「大正自由教育の展開」、池田進・本山幸彦編『大正の教育』第一法規、昭和53年9月、所収、P.383
- 2) 中野光『大正デモクラシーと教育』新評論、昭和52年12月、P.115
- 3) 代表的なものとして、以下の文献がある。  
中野光・高野源治・川口幸宏『児童の村小学校』黎明書房、昭和55年2月  
門脇厚司「私立池袋児童の村小学校と教師たち」、石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教育社会史研究』垂紀書房、昭和56年6月  
田嶋一「池袋児童の村小学校」、民間教育史料研究会編『教育の世紀社の総合的研究』一光社、昭和59年10月
- 4) 中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書、昭和45年11月初版、昭和52年7月再版、に詳細に分析されている。
- 5) 志垣寛編『私立池袋児童の村小学校要覧』教育の世紀社、大正13年8月、P.P.5-6に記載されている表によった。人数、編成ともに変動し、担任も志垣寛→峰地光重、平田のぶ→小林かねよ、と受けつがれていく。
- 6) 同上書、P.7

- 7) 同上書, P. 12
- 8) 野村芳兵衛「トルストイの経験と我等の経験」『教育の世紀』第3巻第6号, 大正14年6月
- 9) 野村芳兵衛『私の歩んだ教育の道』(野村芳兵衛著作集(8)) 黎明書房, 昭和48年2月, P.P. 92-93
- 10) 志垣寛『新学校の実際と其の根拠』東洋図書, 大正14年11月, P.P. 286-287  
野村芳兵衛「子供の作品を取り出して——綴方教育雑感を書くつもりで——」『教育の世紀』第3巻第11号, 大正14年11月  
本文中の引用は志垣『新学校の実際と其の根拠』によった。
- 11) 『児童の村小学校大正十三年度日誌』, 門脇, 前掲論文所収, P. 298
- 12) 野村芳兵衛「私のことや子供たちのこと」『教育の世紀』第2巻第9号, 大正13年9月
- 13) 『児童の村小学校関係資料』(民間教育史料研究会蔵)の(4)に含まれている。
- 14) 志垣寛, 前掲『新学校の実際と其の根拠』, P.P. 273-278  
野村芳兵衛, 前掲「子供の作品を取り出して——綴方雑感を書くつもりで——」
- 15) 志垣寛, 同上書, P. 273
- 16) 同上書, P. 287
- 17) 同上書, P. 287
- 18) 同上書, P.P. 287-288
- 19) 同上書, P. 288
- 20) 野村芳兵衛「夏休みを生かす道」『教育の世紀』第3巻第7号, 大正14年7月
- 21) 杉正男「児童の村の思い出」, 小林かねよ『児童の村小学校の思い出』あゆみ出版, 昭和58年12月, P. 202
- 22) 志垣寛, 前掲『新学校の実際と其の根拠』, P. 288
- 23) 『児童の村小学校関係資料(1)』所収
- 24) このうち, 「めばえ」第2号~第4号, 「JAPAN」, 「卒業記念号」は未見。
- 25) 峰地光重『<sup>文化</sup><sub>中心</sub>国語新教授法(下)』教育研究会, 大正14年12月, P. 263
- 26) 実物は未見。題名の由来となったエピソード(父兄からの鳩のプレゼント)が野村芳兵衛「児童の村だより」(『教育の世紀』第3巻第1号, 大正14年1月)に記されている。
- 27) 峰地光重『<sup>文化</sup><sub>中心</sub>国語新教授法(上)』教育研究会, 大正14年10月, P. 51
- 28) 『児童の村小学校関係資料(8)』所収
- 29) 小林かねよ「児童の村だより」『教育の世紀』第5巻第5号, 昭和2年5月
- 30) 『児童の村小学校関係資料(5)』所収
- 31) 野村芳兵衛, 前掲「子供の作品を取り出して——綴方雑感を書くつもりで——」
- 32) 野村芳兵衛『新教育に於ける学級経営』聚芳閣, 大正15年5月(野村芳兵衛著作集(2)) 黎明書房, 昭和48年4月, P.P. 279-283

- 33) 『児童の村小学校関係資料(6)』所収  
 34) 野村芳兵衛, 前掲『新教育に於ける学級経営』, P.P. 276-277  
 35) 『児童の村小学校関係資料(5)』所収  
 36) 長文のため, 冒頭部のみ引用しておく。

#### 小 犬

昨日ぼくが水をのみに行くと, 外の子供たちが, 小さい小犬をけつたりたゝいたりして  
 ちめてゐたので, ぼくにくれたまへと言つて小犬をもらつた。そうして犬にくびわとつなを  
 買つて, みんなで立教大学に行つた。<sup><ママ></sup>

そして犬を木の下にねかしておいてみんなでおにごつこをした。

あんまりおもしろいので, むちうになつてゐるうちに阿久沢君がもうはじまるかもしれな  
 いと言つたので, 田中さんが犬をだいて, みんなで学校へかへつてみると, もうじぎうが  
 はじまつてゐた。そして小犬を机の上においてみなでしやせいをした。じぎやうがをはると  
 犬が死にそうになつてゐるので, 中村君と阿久沢君が水とパンをもらつてきて, たべさせたら  
 少し元気づいたので, となりのはらつぱへつて行つてあるかせたら, くさをぴしぴしぬ  
 くので「ピシ」と言ふ名にした。 (後略)

- 37) 志垣寛, 前掲『新学校の実際と其の根拠』, P. 271  
 38) 野村芳兵衛, 前掲『新教育に於ける学級経営』, P.P. 273-274  
 39) 野村芳兵衛, 前掲「子供の作品を取り出して——綴方雑感を書くつもりで——」  
 40) 同 上 論 文  
 41) 志垣寛『新興芸術と新教育』教育の世紀社, 大正13年12月  
 42) 野村芳兵衛『新教育に於ける学級経営』(P.P. 274-275)には, 「文の修養」として次  
 の8点があげられている。
- (イ) 生活の観照 △自然なり事件なりの事象を観察すること。△自分の心の動きをみつめること。
  - (ロ) 心の流れに, じっと浸ること。
  - (ハ) 心に響いた実感を基にして, 深い思策をすること
  - (ニ) よき創作を味ふこと。(静かに読んでみる。)
  - (ホ) よき創作の内容と表現形式との融合点に向つて, 研究してみること。(略)
  - (ヘ) 自己の生活を, 文に表現してみること。(略)
  - (ト) 自分の作品を, 自分で何度も味ってみること。
  - (チ) 他人の批評なり, 感想なりをきくこと。
- 43) 「月例夜話 綴方教育の根本問題」(『教育の世紀』第3巻第11号, 大正14年11月)での野村芳兵衛の発言(「然し綴方も図画も指導と云ふ事を考へずに喜び合ふ時を多くもちたいものです, 相互の作品をよみ合つてそこにお互でたのしみ合ふのです。」)。
- 44) 「月例夜会 児童の読物」(『教育の世紀』第5巻第11号, 大正16年1月)での野村芳兵

衛の発言（「……子供が子供の作品を喜ぶといふのは、毎日の彼らの生活の結ばれから親しみがわいて来ることが多いので、よそからはわからぬ味が子供同志のものには感ぜられると思ふ。例へば、一緒に旅行をしてその紀行文を作り合つて読むといふ様な……」）

- 45) 野村芳兵衛, 前掲『新教育に於ける学級経営』, P. 159
- 46) 同 上 書, P. 135
- 47) 同 上 書, P.P. 275-276
- 48) 同 上 書, P. 152
- 49) 同 上 書, P. 153
- 50) 野村芳兵衛「私の学級経営(二)」『教育の世紀』第3巻第2号, 大正14年2月
- 51) 野村芳兵衛, 前掲『新教育に於ける学級経営』, P. 130
- 52) 田嶋一, 前掲「池袋児童の村小学校」では, 児童の村を初期・中期・後期の三期に分け, 中期を「前期の実践をふまえて, 池袋児童の村の教育実践の定型が創出される時期(定型期)」(P. 194)としている。

#### 〔付 記〕

引用文は, 原則として新漢字に改めた。

なお, 国学院大学 田嶋一先生の御好意により, 貴重な資料をお借りすることができた。

記して感謝を申し上げる。